

吉原直樹ほか編 『越境する都市とガバナンス』（法政大学出版社、2006年）

似田貝香門、矢澤澄子と共編著。2006年3月刊、法政大学出版社。

グローバル化の進展にともない、国民国家の結節点としてあった都市はいまや異なる諸主体、異なる諸階層が交差し、交感し、交流する共存的世界を招来し、そのありかた自体が問われている。

本書は、かつてない変容を迫られつつある都市的世界の「いま」を、理論と実証を踏まえ、公共圏、サステナビリティ、ガバナンス、ジェンダー、シティズンシップなどさまざまな側面から問い直す。

目次

序章 越境と共存的世界（似田貝香門）

I 都市空間の変容とローカリティの形成

- 1章 グローバリゼーションと都市空間の再編（町村敬志）
- 2章 成長管理からサステイナブル・シティへ（西山八重子）
- 3章 コミュニティ・リ・デザインとネットワーク（清水亮）

II 都市の共存的世界とガバナンス

- 4章 グローバル化と個人化のなかのソーシャル・ガバナンス（武川正吾）
- 5章 都市の親密圏／公共圏とケアの危機（矢澤澄子）
- 6章 「居住収縮」現象と社会的実践としてのまちづくり（森反章夫）
- 7章 「複数化」する都市のセルフ・ガバナンス（中澤秀雄）

終章 「グローバルな市民社会」と場所のナラティブ（吉原直樹）